

会議に使われます。やっぱり撤収作業は早めがいいですよ！コアタイムが16時からだというのに、15時にはドリルの音が響きやがります。店じまいだよ、と言わんばかりにひとつひとつ看板が下ろされていきます。何度も言いますが僕の発表は16時からです。

17時。ここが流行りのシャッター商店街ってやつですか？僕の対面の若いアメリカ人研究者も、あまりの人の少なさにあきれいています。僕と彼の間の通路は人が通りません。何度も目が合うし暇なのでその彼と話します。「日本人か？珍しいね。友達と来なかったの？」と、いつも通りのたいしてはずまない会話が進みます。でもひとつ覚えしました、人通りのない通りのことを英語では deserted street と言うそうです。Desert は砂漠ですが、動詞では「見捨てる」とかいう、その状況にぴったりの意味があるそうです。とりあえずお互いに写真の撮りあいっこをします(写真5)。そんなことをしていると、僕の左右の発表者はいつの間にかポスター撤収。帰宅です(写真6)。

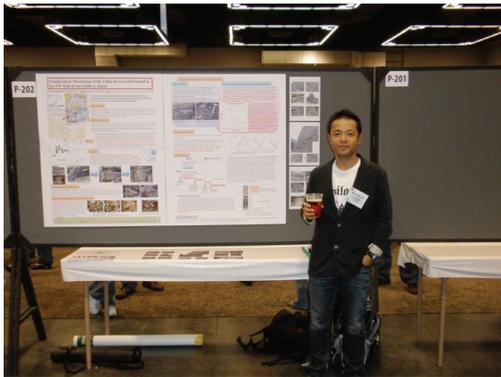


写真5

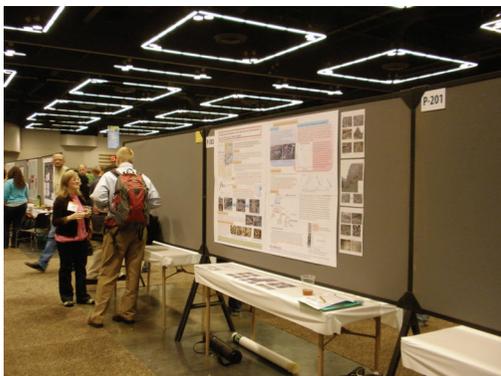


写真6

そして僕の左隣のボード前(写真6奥)では全く関係ない人達がビールを飲んでいました。BARになっちゃったよ。

そんなこんなで発表終了です。最終日という発表条件は最悪でしたが、嬉しいこともあったんですよ。僕らの分野では超有名なアメリカ人研究者がポスターを見に来てくれて、説明をすると非常に興味深く聞いてくれました。内容についても良い結果だ、とお褒めの言葉を頂きました。今回の学会はその言葉だけで満足ですね。また次回もこの学会に参加したいですよ、もちろん発表は最終日以外で。

## 英語の辞書について(3) コロケーション辞典

法学部  
北尾 泰幸

### 1. はじめに

語研ニュース No.21 で英和辞典について、前号(No.22)では英英辞典について述べたが、今回は語と語の結びつきである「連語、コロケーション」(collocation)がよくわかる、英語を書くときに重宝するコロケーション辞典について紹介したいと思う。

### 2. コロケーションとは

学生諸君は日本語の「する」という動詞を英語で言うとどうなるかと尋ねられたら、何と答えるだろう。「do じゃないですか。」と答える学生がいると思う。確かに「宿題をする」(do one's homework)、「皿洗いをする」(do the dishes)、「研究する」(do research)のように do を使う場合もある。しかし、どんなときにでも do が使えるのだろうか。少し考えると、have a meal (食

事をする)、play baseball (野球をする)、make a mistake (失敗する) のように、do 以外の動詞を使う例がすぐに思いつくであろう。このように名詞が結びつく適切な動詞というのは、それぞれの名詞によって異なるのである。では、このような適切な動詞というのはいったいどのようにして調べればよいのだろうか。

また、英語を書き、名詞に形容詞をつけて、名詞の意味を膨らませたときがあるだろう。例えば阪神タイガースファンについて書き記し、この人が熱心なファンであることを述べるとき、学生諸君はこの「熱心な」という形容詞に当たる英語をどうやって探し出すだろうか。和英辞典で「熱心な」を引き、そのあと和英辞典や英英辞典で語の微妙なニュアンスを確かめるようなことを行わず、和英辞典で引いたままの単語をそのまま名詞 fan と重ね合わせてしまう学生が多いのではないだろうか。そうすると、例えば、「熱心な」という意味を持っている hard と、fan を合わせて、“# Tom is a hard Tigers fan.” のような変な文ができあがってしまうのである。このとき、fan とうまく結びつく形容詞はどうやって調べればよいのだろうか。

実はこういう語と語の結びつきのことを、「連語」あるいは「コロケーション」(collocation) といい、このようなコロケーションを調べるときに重宝するのがコロケーション辞典なのである。現在はコロケーション辞典にも様々なものがあるが、それらコロケーション辞典について紹介しよう。

### 3. 英和活用大辞典

#### 3.1 「勝俣の活用」

学生諸君にとっていちばん使い勝手がいいコロケーション辞典は次のものである。

市川繁治郎 (1995) 『新編 英和活用大辞典』  
研究社

この『新編 英和活用大辞典』について語る前に、英和活用大辞典の歴史について少し触れたい。この英和活用大辞典は歴史が古く、「勝俣の活用」と言われた1939年発行 (奥付は1941年) の勝俣銓吉郎『研究社英和活用大辞典』(研究社) にまで

さかのぼる。「勝俣の活用」は、元ジャパン・タイムズの記者で、その後早稲田大学等で教鞭を執った勝俣銓吉郎氏が過去三十余年にわたり収集した英語表現をもとに、「連語、コロケーション」に着目して編纂した辞書である。名詞に最も重きを置き、名詞と動詞のつながり、名詞と形容詞のつながり、名詞と前置詞のつながりの例を記すとともに、動詞については副詞あるいは前置詞とのつながり、そして形容詞については副詞あるいは前置詞とのつながりの例を示している。「勝俣の活用」の「序」で勝俣氏は次のように書いている。

「名詞を主にして、これに他動詞を配する形を最も重要視した譯はかうである。Sentence は通則として動詞を要する。従つて動詞は表現単位として重要な位置を占め、sentence の魂とさへ言はれてゐる。英語の動詞の大多数は他動詞であり、また總て語の連結を支配する親和力の色彩が transitive verb + object なる連語に於て濃厚に現はれてゐるので、その連語は極めて重要な表現単位を成すのである。」

勝俣 (1941: 序)

このように、勝俣氏はとりわけ動詞と名詞の結びつきを重要視し、語の連語に着目して、それまでにはなかった画期的な辞書を作ったのである。それから約20年後の1958年には増補版が作られている。増補版の前書きには以下のような文句が書かれている。

「辞書は語の意義をあきらかにするのがその本領である。わが国における英語を例にとれば、そのために変則的には和訳・和訳による英和辞書があり、正則的には原訳、すなわち英訳による英英辞書がある。

ところが、わたしの『英和活用大辞典』は、これらの英辞書とその類を異にして、語義を示すのではなくて、語が他の語と慣習的に結合して一つの表現単位をなすその姿を広く採集し、これを文法的に排列したもので、その狙いは英語活動態 (English in action) を展示しようとするにある。

こういう観点から編集された辞書は、もちろん、英語にはなく、おそらく他の国語にもないと思う。わたしの辞書が新機軸を出したものであろう。語の

意味だけでなく語の結成型を対象にした辞書は、わが国の英語知識が字で生れ、語で立っているだけで、連語 (collocation) によって歩くという域に達していない現状から見て大いに意義がある存在と言えよう。」

勝俣 (1958: iii)

この文言から、いかに勝俣氏がこの英和活用大辞典を自負していたかがわかるだろう。勝俣氏は同じ前書きに、以下のような文句も記している。

「初版の序に、私はこの辞書が「作った辞書」ではなく「出来た辞書」であるということを書いたのであるが、ここではこの辞書が「引く」だけではなく、「読む」辞書でもあるということを強調したい。この辞書を一日一ページときめて読めば、わたしが五十年かかって何万ページから拾い集めた何十万というコロケーションを四年ばかりで通覧し、English in action の千容万態のレビューができるのである。この実行を切におすすめる。」 勝俣 (1958: iii)

勝俣氏が書いているように、英和活用大辞典はコロケーションを調べるために引くのに重宝する辞書であるが、それと同時に読んでいてもとても楽しい辞書である。ページをめくるたびに新たな発見があり、英語と日本語のことばの捉え方の違いも知ることができる「英語の百科事典」と言ってもいいほどの辞書である。実は私の研究室に「勝俣の活用」の初版と増補版がある。私の父が大学生のとき、所属していた会計学 (簿記) のゼミの先生から「勝俣の活用」を勧められ、お金を貯めて購入し英語学習に用いたとのことで、それを譲り受けた。本が古くぼろぼろになっているが、もし見てみたい学生がいたら、ぜひ研究室に見に来ていただきたい。

### 3.2 市川繁治郎 (1995) 『新編 英和活用大辞典』

この「勝俣の活用」は勝俣氏が個人で収集した例をもとに作られた汗と涙の結晶である辞書であるが、個人が収集できなかった例は収録されていないという問題点も残る。そこで市川繁治郎先生を中心に1985年から「勝俣の活用」を全面的に改訂する作業が進められ、1995年に『新編 英和活用大辞典』が発行された。改訂の際には、実際に

使われている現代英語の用例が収められた資料である「コーパス」(corpus) も活用された。

この辞書が英語を書くときにいかに重宝するか、名詞 research を例にこの辞書の効用を探ってみよう。『新編 英和活用大辞典』で名詞 research を引くと「n. 調査; 研究; 研究心」という意味とともに、次の下位分類から始まる連語情報が載っている。

- ・ 動詞 + 、 + 動詞、 形容詞・名詞 + 、前置詞 + 、 + 前置詞

動詞 + の項では名詞 research の前にどのような動詞が来るか挙げられている。+ 動詞 は、名詞 research の後に続く動詞が載っている。形容詞・名詞 + は名詞 research の前に現れる形容詞および名詞が挙げられ、前置詞 + は名詞 research の前に来る前置詞、+ 前置詞 は名詞 research の後に続く前置詞が挙げられている。このように共起する語句を品詞ごとに挙げているのである。例が多いため全て載せることができないが、上記のうち 動詞 + の部分を抜き出し、下に挙げる。

<sup>1</sup>research n. 調査; 研究; 研究心.

(動詞+) carry on research 研究を行なう / carry out research into quarks クォークの研究を行なう / commission cancer research がんの研究を委嘱(じやく)する / complete one's research 研究を完成する / conduct researches into ... ..の研究を行なう / His researches are contained in a book recently published. 彼の研究は最近出版された書物に収められている / continue one's research in anthropology 人類学の研究を続ける / The association coordinates research into industrial archaeology at US universities. この協会はアメリカの各大学で行なわれている産業考古学の研究を調整している / a work displaying wide research and keen discernment 広範な研究と鋭敏な眼識を示している著作 / do research in marine biology [on brachiopods] 海洋生物学[腕足類]の調査[研究]を行なう / encourage research 研究を奨励する / extend one's researches farther afield 研究の対象をさらに広範囲に広げる / finance [fund] cancer research がん研究に資金を提供する / institute exact researches into ... ..の精密な研究を始める / make researches into ... ..の研究をする / patronize archaeological researches 考古学の研究を後援する / prosecute research on a subject ある問題の調査を行なう / pursue one's linguistic researches 言語学の研究を進める / sponsor sb's research 人の研究のスポンサーとなる[資金を出す] / stimulate and promote research 研究を刺激し助長する.

市川 (1995) 『新編 英和活用大辞典』

動詞 + の項で挙げられている carry on research (研究を行なう)、carry out research into quarks (クォークの研究を行なう)、conduct researches into... (...の研究を行なう)、do research in marine biology (海洋生物学の調査[研究]を行な

う)、*make researches into...* (...の研究をする) などから、「研究を行なう/研究をする」と言うときは動詞 *carry on, carry out, conduct, do, make* と結び付くということがよくわかる(注:しかし、これら動詞の間でも使用頻度の差があり、例えば *make research* はあまり使われず *do research* の言い方のほうがはるかに多い)。また、*pursue one's linguistic researches* (言語学の研究を進める) の例から、研究を先へ進めるという場合は動詞 *pursue* が使われること、また「研究を奨励する」という場合は *encourage research* と言うといった情報が得られる。従って、英語を書いているとき、書きたい内容を一度日本語に置き換えて、それを和英辞典で引き、出てきた数多くの候補の中から、当てはまるものが何であるか英和辞典なり英英辞典で探る... というように英語頭を日本語頭に切り替える作業をするのではなく、『新編 英和活用大辞典』で *research* を引き、当てはまる下位分類に挙げられた例を見ていると、「僕が表したかったのはまさにこれ!」といった具合に的確にはまる表現が見つけれられるのである。

名詞 *research* について見てみたが、当然品詞が変われば下位分類も変わってくる。例えば、動詞 *ask* を引くと、次のような下位分類が挙がっている。

- ・ 副詞 1 、 副詞 2 、 +前置詞 、 +to do 、 +that節 、 +wh. 、 雑

この下位分類から、動詞 *ask* は後に *to* 不定詞や *that* 節、*wh* 句を従えることが可能であることがわかり、また *to* 不定詞や *that* 節、*wh* 句が共起するときにはどのような意味のときであるかがよくわかる。また *to* 不定詞は従えるが、動名詞 (-ing形) は従えないことがわかる。このように、コロケーションに加えて、語の文法、つまり語法も調べることができるのである。

このように、『新編 英和活用大辞典』は連語(コロケーション)情報がよくわかり、特に英語を書くときに重宝する辞書である。紙媒体に加えて、2005年には CD-ROM 版が、そして2008年には研究社の『リーダーズプラス』、『新英和大辞典 第6版』、『新和英大辞典 第5版』とセットになっ

た DVD-ROM Windows 版である『電子版 研究社英語大辞典』が発行されている。CD-ROM 版、DVD-ROM 版とも、コンピュータにインストールすることができるので、使うたびにいちいちコンピュータに CD-ROM や DVD-ROM を入れて起動させる必要もない。紙媒体は16,800円、CD-ROM 版が13,650円、DVD-ROM 版が31,500円と決して安くはないが、実は英語の授業をしていてわかったのだが、学生諸君が持っている電子辞書にはこの『新編 英和活用大辞典』が入っている機種も多いようである。持っているだけで使わないのは宝の持ち腐れである。今までどういう辞書がよくわからず、使うことをためらっていた学生諸君は、これを機にぜひ使っていただきたい。電子辞書に『新編 英和活用大辞典』が入っていない学生諸君は、図書館に紙媒体の辞書があるので、ぜひ活用していただきたい。

### 3.3 その他のコロケーション辞典

このように、コロケーション辞典は語と語の結びつきを教えてくれ、英語らしいナチュラルな表現を書くのに重宝する。学生諸君にとっていちばん使い勝手がいいコロケーション辞典が上で述べた『新編 英和活用大辞典』であるが、他のコロケーション辞典についても記しておく。

Benson, M., Benson, E. and Ilson, R. (2010) *The BBI Combinatory Dictionary of English (Third Edition)*, John Benjamins.

このコロケーション辞典は、1986年に First Edition が発行されているが、1993年に New Printing のバージョンが、そして1997年に Revised Edition が発行され、本年4月には Third Edition が発行されている。書名の BBI は著者 Morton Benson, Evelyn Benson, Robert Ilson のラストネームの頭文字を取ったものである。コロケーションが句 (phrase) のレベルで表示されている。文 (sentence) の形では出てこないうえ、もちろん洋書であるので英語で書かれているため、英英辞典を使いこなしている学生諸君でなければなかなか巧みに使いこなすことはできないと思うが、『新編 英和活用大辞典』に載っていない見出し語も多数あり、ま

た見出し語の中身も大きな括りで定義 (definition) ごとに分類して連語情報を載せているので、語の微妙なニュアンスの差も探りやすい。また見出し語によっては“USAGE NOTE”という項目があり、語にまつわるちょっとした付加情報が載っている。例えば、chairman (議長) の USAGE NOTE では次のような情報が載っている。

• ... in order to promote non-sexist language, the terms *chair* or *chairperson* are used more and more in place of *chairman* or *chairwoman*.

(言語に性差を求めない動きから、*chairman* や *chairwoman* に代わって、*chair* や *chairperson* という用語がより用いられるようになっている。)

別売で、BBI を使いこなせるように、BBI を引いて答えを探る練習問題が載った *Using the BBI* というワークブックがある。これまでは本の形で出版されていたが、Third Edition からは版元の John Benjamins のホームページで PDF ファイルを無料でダウンロードできるようになったので、英語の達人になりたい学生諸君はぜひダウンロードして挑戦してもらいたい。

*Using the BBI: A Workbook with Exercises for the BBI Combinatory Dictionary of English.*

(URL) <http://benjamins.com/jbp/series/Z/bbi/workbook.pdf>

もし「BBIに興味があるけど、洋書はちょっと…」という学生がいれば、BBI の日本版がある。

寺澤芳雄 (監修) (1993) 『BBI 英和連語活用辞典』丸善

日本版では和訳も書かれているので、学生諸君にとっては求めている語を探しやすいだろうし、また日本語と英語の差がよくわかるだろう。ただ、日本版は1986年の First Edition をベースにしたものなので、若干情報が古い。Revised Edition の日本版も発行されなかったが、そろそろ2010年の Third Edition をベースにした新版の日本版が出ておいしいのではないだろうか。

McIntosh, C. et al. (eds.) (2009) *Oxford Collocations Dictionary for Students of English (Second Edition)*, Oxford University Press.

このコロケーション辞典のよいところは、『新編英和活用大辞典』のように、各見出し語と結びつく語句を品詞別に挙げており、見出し語と結びつく語句を太字で羅列したうえで、例文を書いている点である。よってシソーラス (thesaurus) を引くような感覚で使うことができる。しかし、見出し語が結びつく語全てについて例文が載っているわけではない。もちろん英語で書かれているので、普段英英辞典を使いこなしていなければなかなか使いこなせないかもしれない。BBI 同様『新編 英和活用大辞典』に載っていない見出し語もあり、勉強になることも多いので、英英辞典を使い慣れている学生はぜひ使ってみていただきたい。

木塚晴夫 (1995) 『動詞 + 名詞 英語コロケーション辞典』ジャパンタイムズ【絶版】

これは学生諸君には使いやすい辞書であると思うが、残念ながら絶版になっている。しかし、愛知大学の図書館にあるので、一度手に取って見てもらいたい。名詞がどのような動詞と結びつくか、代表的な動詞が挙げられている。動詞と名詞の連語しか載っていない。またその連語も典型的なものだけが収められているので『新編 英和活用大辞典』と比べると物足りないが、基本的なコロケーションを勉強するには役立つだろう。

また、本年5月末には Macmillan Language House からコロケーション辞典が出るそうである。この原稿が活字になるころには書店に並んでいるだろう。

#### 4. まとめ

今回は英語を書くときに重宝するコロケーション辞典について紹介した。学生諸君は今まであまり「語と語の結びつき」について深く考えたことがなかったかもしれないが、実は英語を書くにあたってコロケーションに気を配ることは非常に重要である。英語非母語話者にとって英語のナチュ

ラルな語と語の結びつきはなかなかわかりにくいので、コロケーション辞典は大いに役に立つ。一度コロケーション辞典を手にとって使い始めると、その使い勝手のよさがよくわかり、英語を書くときにはコロケーション辞典が手放せなくなるであろう。今までコロケーション辞典を使ったことがない学生諸君はぜひ一度使っていただき、その便利さを肌で感じてもらうと同時に、英和活用大辞典の創始者・勝俣氏が前書きに書いていたように、時にはコロケーション辞典を「読み」、英語の奥深さ・面白さを堪能していただきたい。

### 補遺. 日本語のコロケーション辞典について

英語のコロケーションは、特にコーパスが言語研究に多く用いられるようになってからは盛んに研究され、辞典も多数発行されているが、日本語のコロケーションの辞典については、まだあまり発行されていない(ただし「表現辞典」「日本語使い方辞典」のようなものもコロケーションの辞典であると考え、それなりにあるが)。詳しくは日本語を研究している先生方に聞いていただきたいが、私が知っている日本語のコロケーション辞典としては次のものがある。

- ・金田一秀穂 (2006) 『知っておきたい日本語コロケーション辞典』学研
- ・姫野昌子 (2004) 『研究社 日本語表現活用辞典』研究社
- ・小内 一 (1997) 『究極版 逆引き頭引き日本語辞典 名詞と動詞で引く17万文例』講談社(講談社+ 文庫)【絶版】

金田一 (2006) は名詞を見出し語として動詞との結びつきを記しており、姫野 (2004) は動詞と形容動詞類を見出し語として挙げている。小内氏の文庫本はまだ日本語のコロケーション研究が盛んになされていないときに発行されたもので、なかなか面白い。言語学者ではない、校正を仕事とする小内氏が独自に集めた連語情報を載せたもので、その意味では「勝俣の活用」を思い起こさせる。その後、姫野 (2004) のようなより優れたコロケーション辞典が出たというものの、小内 (1997) の本が絶版になったのが残念である。

## D.H.ロレンスの動物の描写について (その4)

経営学部

山田 晶子

ロレンスは、*Birds, Beasts and Flowers* (1923) という詩集で、多くの動物を詠っている。ここで取り上げられている動物は数多であり、コウモリや魚や蚊から、亀や蛇等の爬虫類までが詠われている。中でも有名な詩として‘Snake’「蛇」がある。今回はロレンスの文学において重要な象徴性を持つ蛇について書こうと思う。

蛇と言えば、聖書の創世記におけるアダムとイブを誘惑した蛇が世界的によく知られていると言えよう。エデンの園と言えば蛇の存在が欠かせない。エデンの園は楽園なのに、蛇という恐ろしい存在が潜んでいる。永遠の楽園は存在しないのである。神との闘いに敗れた悪魔サタンは地獄に落とされ、神への復讐の機会を虎視眈々と狙っていたが、遂に神の大事な大事な創造物であるアダムとイブを誘惑して墮落させるという報復手段を思いついた。そしてアダムとイブは、蛇に化身したサタンの姦計にかかり、神の命令に背いて知恵の木の実であるリンゴを食し、エデンの園を追われたのである。以上のことを鑑みれば、蛇はキリスト教者にとっては悪の存在であり、世界中にキリスト教の思想は広まっているので、蛇は「悪」の存在として受け取られていると思われる。また、蛇は形姿の似ていることから竜と関連しているので、竜もキリスト教圏内では悪として考えられるようである。絵画においても竜を退治する聖ミカエルの主題はたびたび表われている。

しかし、一方では蛇や竜が「善」なる存在として考えられることも多い。ロレンスの作品に描かれた蛇や竜は、この「善」としての意味を持っている点で、彼の思想の独創性を表わすものとして